

## 不朽のデザイン市松模様 —NHKBS プレミアム「美の壺」より—

三 梲 正 典\*

(2021年8月16日 受理)

### Timeless Design Checkered Pattern —From NHK BS Premium “Beauty Pot”—

Masanori MIMASU\*

This manuscript describes the charm of the checkered pattern inherent in the expression while looking back on the origin of the production,” Jamanese Modern”.

**Keywords:** Checkered Pattern 市松模様, Japanese Modern ジャパニーズモダン, Japanese Art 日本美術

#### はじめに

2020年11月27日（金）午後7時30分放送、NHKBS プレミアム「美の壺」で2016年に制作した襖絵「市松桜」が紹介された。番組のテーマは「不朽のデザイン市松模様」。番組ホームページではテーマについて以下のように紹介されていた。

「鬼滅の刃」で大人気の「市松模様」。縄文土器・埴輪・着物・切子・やきもの・庭・ふすまなど、あらゆるものを美しく飾ってきた、市松模様の知られざる魅力に迫る！スーツから靴下まで、市松模様を毎日身につける狂言師・茂山逸平さん。愛用歴20年の市松アイテムを大公開！縄文土器や埴輪にも！写楽も描いた「市松」の名の由来の人物とは？！漆黒市松のスタイリッシュな江戸切子に、3500の四角がうごめく市松模様の九谷焼。現代にいきる、市松模様ならではの美。京都・東福寺にある重森三令の市松模様の庭。その意図を孫が読み解く！古民家に輝く、市松のふすま絵！

番組は1. 交互～繰り返す四角の妙～2. 工芸～平面を超えて～3. 見立て～整然から解き放つ～の3部から構成されていて、そのぞれの視点から市松模様の持つ魅力が紹介されていた。筆者の作品はその3つ目の視点見立て～整然から解き放つ～の場面で京都東福寺の重森三玲氏が手がけた庭と共に紹介された。制作から数年経過した作品をあらためて鑑賞の視点から紹介して頂いたが、制作過程のインタビューを通してまた新たな市松模様の持つ不思議な世界を再認識するきっかけにもなった。

---

\* 広島女学院大学人間生活学部児童教育学科教授

本稿では、自分の制作の原点を振り帰りながら、「不朽のデザイン市松模様」のテーマの中で新たに気づかされた自分の表現に内在する市松模様の魅力を辿ることとした。

## ジャパニーズモダン

襖や屏風、掛け軸の制作を行い始めて今日まで約10年、制作の土台となっているテーマが「ジャパニーズ・モダン」である。「モダンアート」という言葉は美術史において「主として20世紀になってから第二次大戦前までに生まれたシュールレアリスム・抽象主義など新傾向の美術」と表記されるが、ジャパニーズ・モダンという言葉については、美術史上には聞き慣れない言葉で、デザインの礎として第二次世界大戦後に渡辺力・柳宗理・長大作・水之江忠臣らと共に家具デザイナーの剣持勇氏が「ジャパニーズ・モダン」という用語を最初に用いたと言われる。鹿野政直は「ジャパニーズ・モダン 剣持勇とその世界」で剣持が提唱した「ジャパニーズ・モダン」の構成美について以下の様に述べている。

彼は、スウェーデン工芸に「機械と手、人間と自然、理知と感情、それまでどうしても融和しなかった矛盾するもの」の「見事な一致」,「何よりも人間的なその美しさ」,「異国趣味とか、骨董趣味とか、貴重珍奇とかそんなものではなく土地に根ざしたほんもの」の造出を見、その上に立って、「かつては日本では、通常の視覚言語であったシンプリシティの美が今日では世界を通じての美の言葉となった」としつつ、そこに根ざす造形美すなわち「ジャパニーズ・モダン・デザイン」を主張した<sup>1)</sup>。

また剣持は「ジャパニーズ・モダンとは日本のグッドデザインなのだ」と提唱し、戦後欧米を中心とした新しい生活様式が流入する中、日本人の生活用具の中のグッドデザインを海外に輸出する試みも行っていた。剣持はこの「ジャパニーズ・モダン」は北欧のモダンデザインと並んで期待される日本デザインであることに気づき、家具からインテリア、建築分野へと展開させて行っただけである。森は剣持の追い求めた「ジャパニーズ・モダン」を「日本的なるもの」として以下のように述べている。

剣持は単に伝統を復興させたり、引用しようとしたものではありません。あくまで、モダン・デザインを実践するなかで、日本独自の味わいが表われ評価されることを期待し、求めていました。経済大国となった日本は精神的なよりどころを求め始めます。建築もこの頃には現代的な材料で日本を意識することが多くなり、こうした難題に剣持の手腕はうってつけでした<sup>2)</sup>。

その「ジャパニーズ・モダン」をテーマとして今日まで作品制作続けてきた。制作するにあたって大きなきっかけになったのには、3つの出会いがある。その一つが、2011年に放映された美術史家で明治学院大学教授山下裕二氏解説のNHK番組「大胆不適な水墨画」。もう一つは2005年から京都のギャラリー白川で開催されている「現代アートうちわ展」。そして2011年に観た作家重森三玲の作品である。いずれの出会いにも伝統的な「日本美術」が根幹にあり、強烈なインパクトと共に制作意欲を掻き立てられたのである。

## 日本美術

### (1) 日本美術と山下裕二

日本における美術は、原始から現代に至る各時代に諸外国との交流によって流入した美術とそれまでに熟成した日本美術との融合のなかで様々な多彩で個性的な展開を見せてきたと考える。1997に発行された「日本美術館」では、先史時代から現在までのそれぞれの時代美術作品を取り上げているが、その冒頭に日本の美術の作品について以下の様に述べている。

われわれは、この日本列島において、長年にわたってさまざまな「文化」を育んできました。これらはすべて、日本列島の中で悠久の時を過ごしてきた日本人の営みであり、工夫の結果であり、生活の知恵であるわけです。それらの中で、現在に至るまで「目に見える形」として残されているものに、「美術」の「作品」がある<sup>3)</sup>。

この「美術」の「作品」が大枠で捉えた「日本美術」と考えられる。その「日本美術」のイメージは、「現代美術」をジャンルとして制作してきた自分にとっては、馴染みの薄い世界で幾分古めかしいイメージがあった。そのイメージを一変させられたのがNHKの番組「大胆不敵の水墨画」。そこで中心的な存在で解説を担当していた美術史家で明治学院大学教授山下裕二氏の魅力的な言葉を駆使して解説された「日本美術」である。その魅力を引き出してくれる山下の言葉の数々を通して見る作品は、全く新しい感覚の「日本美術」であった。

その番組の基になっているであろう「別冊太陽水墨画発見」（図1）の見出しには「目からウロコ的水墨画発見！」を記され、続いて水墨画について以下の様に述べられている。

雪舟だろうが等伯だろうが牧谿だろうが、自分の眼で見て、つまらなければ、切り捨てればいい。「伝統」という美名で古ものをなんでも奉るの、はやめたほうがいい。でも、いま、ここに何百年も前に描かれた水墨画がたしかに存在しているのです。そんな、私がこれまでにみてきた水墨画を、多くの人がみたこともない、という現実があるわけです。水墨画だけでなく、これは日本美術全体の問題でしょうが、とにかく見たこともないのに、何となく水墨画は「日本のこころ」だなんて思われているのは、不幸なことです<sup>4)</sup>。

見たこともない水墨画の中で最も衝撃を受けたのが「白隠」。「大胆不敵の水墨画」の番組で白隠を山下氏は以下のように紹介していた。

白隠の人生を振り返ってみますと私は本当にこの人は人間的にも凄いスケールを持った素晴らしい人物で最も歴史上 尊敬する人物と言って良いかもしれません<sup>5)</sup>。

また、白隠の描く禅画を「空前絶後のど迫力」と題し、「描かれる人物は、達磨でも布袋でも、あるいは大燈国師といった祖師でも



図1 平凡社「水墨画発見」

そのほとんどは白隠の分身。白隠が生み出したキャラクター、アイコンが、雄弁に語りかけてくる」と全容に触れ、作品「達磨像」の解説文では、「絵のツボ」「即興かつパフォーマンス的に仕上げた」「墨が散るほどに速い筆の動きは、ほとんどアクション・ペインティング。20世紀アメリカの抽象表現主義の画家も顔負けの一作です」と表記している。

山下の文章や言葉には人を引き付ける魅力や価値を見出す力がたくさん詰まっている。作家は、まるで身近にいた隣人のように親近感をもって紹介し、作品は現代絵画を見ているように普段使っている現代用語を巧みに混ぜながら解説している。日本美術を歴史上の「伝統」と感じていた私の価値観は山下によって「斬新」なものに変わり、ワクワクとドキドキ感を持って改めて日本美術という扉の前に立つ機会を得た。

その後は、水先案内人とも言える山下によって新たな日本美術の魅力に出会うこととなった。

## (2) 日本美術の魅力

1996年、山下は前衛芸術家の赤瀬川原平氏と日本美術応援団を結成し、「日経アート」誌上で雪舟、等伯から、縄文土器や根来塗の器まで日本美術を幅広く応援。教養主義や美術史にとらわれない美術鑑賞法を提示する活動をスタートさせていた。当時の美術を取り巻く状況は、世界各地で国際美術展（ビエンナーレ・トリエンナーレ）が開催され、新しい芸術が競うように紹介されていた。日本における美術の状況も、1989年日本で初めて「現代美術」の銘打つ公立美術館が広島で開館し、その後様々な美術館で外国の現代美術作家の企画展が開催され注目を集めていた。私も現代美術作家のコンセプチュアルな表現方法に夢中になり、多くの刺激を受けながら作品を制作していたことを思い出す。そのような状況の中、誰も見覚えのある日本美術の作品を赤瀬川氏と共に学問的な美術史の価値観と独特の審美眼で対談していく内容は、評価されている作品の後追いだけではなく、「雪舟が神棚から降りてくる」「北斎よ、その肺活量の大きさは何なんだ」「焼きたてのクッキーとの対話 縄文、恐るべし」などのタイトルからも見て分かるように、新しいユニークな解釈を加えることによって、次第に日本美術の魅力を引き出していつている。そして日本各地の美術館で日本美術の作品や作家の企画展が頻繁に開催される「日本美術ブーム」という現象を起こしていったのである。またその企画展は「北斎」「狩野派」「琳派」「浮世絵」「国宝」など既知のテーマだけでなく「伊藤若冲」「白隠」「曾我蕭白」「長沢廬雪」「海北友松」など今まであまり耳にしたことのない作家展のテーマにおいても多くの来館者があった。このことは日本美術における新しい現象として「日本美術ブーム」の追い風になり、そのブームは今なお続いているのである。

日本美術の魅力は、外国人コレクターの審美眼からも伺うことができる。その代表的な一人がアメリカ人のジョー・D・プライス氏（1929～）山下は彼との対話をまとめた本「若冲になったアメリカ人」の中で彼について以下のように述べている。

18世紀半ばの京都。すさまじい才能をもった画家たちが、京の街中の、歩いて行き来できるようなところに住んでいた。パリやニューヨークに喩えるのは癪だが、これほどの才能がぎゅっと凝縮された場所に集まったことは、歴史上、そうあることではない。あるいは、16世紀のフィレンツェや、12世紀の杭州に喩えたほうがいいか……。だがそんな画家たちのすごさを、とうの日本人は長らく忘却してきた。若冲ひとりとっても、20年前には「ジャクチュウ」と読める人など、

ほとんどいなかった。情けない「近代史」や「戦後史」を象徴する事実である。1953年、スポーツカーを買うつもりのお金を若冲に変えた若きプライスさんは、日本人が忘却していた美観を独力で理解し、その後、コレクションに邁進した。江戸時代絵画のすばらしさを、繰り返し、控えめに、しかし熱く語り、研究者たちを鼓舞してきた<sup>6)</sup>。

「日本人が忘却していた美観」への理解は、プライス氏にだけではない。俵屋宗達を再発見し、ワシントンにフリーア美術館を設立したチャールズ・フリーア。進駐軍の美術顧問として来日後、1948年にシアトル美術館、1954年にクリーブランド美術館のキュレーターとなったシャーマン・リー。より深く作品の背景まで理解しようと日本美術史を研究したメアリー・グリッグス・パークなどの理解ある富裕層によって「国内に留まっていたら間違いなく国宝に指定されていただろう作品」がコレクションされアメリカへと渡った。1984年に東京のサントリー美術館で「異色の江戸絵画―アメリカ・プライスコレクション」1985年東京国立博物館において「パークコレクション日本美術展」などの里帰り展が開催されたが、これら海外からの展示も忘却していた日本美術の価値を見直す機会となり「日本美術ブーム」の一端を担ったのではないと思われる。2019年アメリカ人による日本美術のコレクションを特集した番組「江戸アバンギャルド」が2回に渡って放送された。番組は、何百年も前に江戸時代の絵師が描いた絵がとても斬新でアバンギャルドに見えると捉えるアメリカ人の映画監督リンダ・ホークランド氏が「何故日本の美術がアメリカ人の心を捉えたのか」という疑問に向かうアクションが中心の構成になっている。その疑問に山下は以下のように答えている。

西洋の美術というのは基本的に人間の目から見た自然です。だけど日本の絵の考え方は人間は自然の一部であって神の目を見た自然を描こうとしています。だからパースペクティブな遠近法とは違う描き方をしているわけです。そもそも人間の目を見たものをそのまま描く意識がないわけです。それが当たり前だったのです。そこが大きな前提の違いです。

なんか描く必要はない。そういうことかもしれない。逆に言えば、当の日本人がちょっと明治以降卑屈になっていた歴史があるから、西洋から美術がどっと入ってきて「絵とはこういうものだ。」ってそれにつき従わないといけないみたいにして150年来た歴史があります。それで「日本の美術は遅れたものだ。」というみたいに当の日本人が思い込んでしまった。そんな中アメリカのコレクター達が日本にやって来て、日本人が評価していないものを自分の目で見えて買っている。

日本のマーケットはこれまでの格式に囚われていて、この画家の作品だから高価など、この画家はあまりネームバリューがないから安価みたいな。だけどそうではなく、作品そのもののクオリティーから判断すれば、「こんな良いものがこんなに安価だ」と思って買ったものがたくさんあるんだと思うのです<sup>7)</sup>。

ニューヨークメトロポリタン美術館をはじめ、アメリカ各地で10万点とも言われる日本美術のコレクション、西洋のコレクター達は深い知識はなかったが自分の目を頼りに見事な作品を収集してきたのである。そこには日本人が忘却していた美観や価値観など日本美術の魅力がたくさん詰まっているのである。それらを山下は発掘して独自の表現によって分かりやすく、ユーモアもふんだんに取り入れて現代に届けてくれているのである。



### (3) 現代アートうちわ展



図2 現代アートうちわ作品

2022年7月第16回現代アートうちわ展が京都のギャラリー白川で開催された。私も出品作家として第1回目から参加させて頂いている企画展。出品作家は約30名。地元作家から世界的に活躍している松谷武判氏など多彩である。作品の多くは、京都で古くから手すき和紙と竹で作られている手作り団扇がベースとなっている。「この伝統的な団扇にどのような絵を描いたらいいのか？」という試行錯誤の繰り返しだが、今日「ジャパニーズ・モダン」を題材に制作する大きなきっかけとなった。その基本となった形は、「市松模様」。江戸時代中期に佐野川市松という歌舞伎役者が舞台でこの模様の袴を着ていたことで大流行した格子の色違いのチェック柄。2021年に開催されたの東京オリンピック・パラリンピックにも用いられている。2010年、白い団扇に市松模様を切り抜いて作品（図2）にしたところ、「現代アートうちわ」という企画タイトルに馴染む不思議な感覚を感じた。その後の現代アートうちわ展には、この市松模様をベースとした作品の色々なバリエーションが展開していくこととなったが、この展開が起点となり、制作は、団扇に限らず、襖や屏風、掛軸など日本の伝統的な表具へと広がっていったのである。

テーマ「ジャパニーズ・モダン」は、ギャラリー白川のオーナー池田真知子氏が提唱している言葉。その定義は、「日本の伝統的なデザイン・素材・材料を用いて再構成された現代美術。ギャラリーの新シリーズ企画として「ジャパニーズ・モダン」という言葉が使われ、2015年、記念すべき第1回作家として「ジャパニーズ・モダン 江戸から現代へ 三樹正典展－市松模様を描く－」を開催していただいた。その展覧会パンフレットには、シリーズ誕生について池田は右のように述べている。

現代において「日本の美」を追求していくと、「日本の美」が生き生きと目に映る時代があります。「江戸時代」です。鎖国の中で豊かに「日本の美」が成熟したこの時代に視点を戻し、江戸時代に花開いた「日本の美」を現代に繋いでいくことが新たな「日本の美」への創造へとつながっていくのではないかと。この思いが、同じような視点で「日本の美」を創造していこうとする現代作家の皆さんを紹介する展覧会のシリーズを誕生させることになりました。さらに、この思いを

深めさせたのは、ギャラリー白川が10年間開催してきた「現代アートうちわ展」です。うちわの歴史は古く古墳時代からあるのですが、それは庶民の物ではありませんでした。しかし、江戸時代に入ると、庶民の間で生き生きと「うちわ文化」が花開きます。今まで縦目線で追っていた「うちわ」の歴史を横目線で見渡すと、そこには「うちわ文化」だけでなく、浮世絵や歌舞伎や、大衆文学を生み出した江戸という時代があり、それらは琳派へ、光琳へたどり着きます。「ジャパニーズ・モダン 江戸から現代へ」、長年温めてきた企画のスタートです<sup>8)</sup>。

#### (4) 市松模様と重森三玲

重森三玲(1896-1975)は、数々の名庭を作成した昭和を代表する名作庭家である。最初日本画家を目指していた彼は、西洋の抽象画に大きな影響を受け、新しい日本画を目指していた。しかしその作品は、当時の画壇では全く評価されず、画家を諦め、京都の地で美術研究家として、生け花やお茶、庭など様々な分野で日本文化の歴史を探究した。大きな転機となったのは、昭和9年、38才。近畿地方を襲った室戸台風により、各地の日本庭園が大きな被害を受け、修復の手がかりすらできない現状を目のあたりにしたことである。その後彼は、自ら日本中の庭を巡り、一つ一つの石の位置まで詳細に測量し、庭の様子を書き写し、3年の歳月をかけて300の庭を調査、測量と共に歴史も調べ「日本庭園史図鑑」としてまとめた。そして昭和14年、43才。本格的なデビュー作品として制作したのが京都東福寺の庭であった。彼の表現は、現在「永遠のモダン」と称される。三玲の孫であり重森三玲庭園美術館館長の重森三明氏は、三玲のモダンについて以下のように述べている。

「永遠のモダン」とは、重森三玲が好んで繰り返した言葉であり、彼の作品を貫通する美意識だ。それは、個展と現代に同じく存在し、ある時代においてのみ好まれ理解されるのではなく、時を越えて輝きつづける完成した美の姿である。(中略)三玲のモダンの基準は、建築やデザインの世界で理解されているようなモダニズム、モダン・デザインとは少し違った視点に立っており、永遠のモダンを内在する作品には、静的でミニマルなものもあれば、動的で躍動的なものもある。つまり、三玲のモダンは、外的な美しさだけではなく、作品の内に秘められた生命力や永遠性を言い表した言葉であるといえよう<sup>9)</sup>。

重森三玲の目指す「永遠のモダン」。彼の作品に初めて出会ったのは、2012年。広島市安佐南区長東西にある「桜下亭」。彼が手がけた全国でも数少ない個人亭の一つ。その庭園の持つ美しさと迫力に圧倒された。その後彼の作品を追うように訪ねたが、最も惹きつけられたのが、東福寺方丈庭園北・西庭(図3)である。何れも市松模様が入り入れられている作品であるが、自然や空間を見事に取り入れた世界は、何時間見ても飽きることのない永遠の心地よさを感じる。三玲の永遠性を三明は「永遠の生命を宿した美」として以下の様に述べている。

名作とよばれるまでに高度に完成した芸術作品には、作家の魂が吹き込まれており、あたかも生き物のような生命感を感じる。永遠のモダンとはこのような生き生きとした作品(人工美)であり、モダンなかたちに刻み込まれた生命は、年月を超えて生きつづけ、永遠性をあらわす<sup>10)</sup>。

日本庭園が持つ抽象化された表現「永遠のモダン」との出会いが、「ジャパニーズ・モダン」をテーマとして今に続く一連の襖絵制作の大きなきっかけとなり、今でも心の基盤として制作の支えとなっているのである<sup>11)</sup>。



図3 重森三玲作 京都「東福寺 方丈庭園」北・西庭

### 不朽のデザイン市松模様

重森三玲に影響を受け、彼の表現する市松模様を取り入れた作品を今回の「美の壺」の番組で紹介して頂く流れとなった。紹介された作品は2点。1点は、呉市蒲刈町の蜜柑を赤や黄色、緑色を和紙の上で重ね、刷毛で金色を施して市松模様で表現した襖絵（図4）と広島県安芸郡海田町の築246年の古民家（旧千葉家）の居間に太陽が昇り、刻々と日差しを強め西へ傾いていく光の移ろいを庭にそびえ立つ樹齢100年の山桜の花びらが舞い込む光景と共に市松模様で描いた襖絵（図5）。



図4 秋（蜜柑）2012



図5 市松桜（春）2016

今回取材インタビューに答えていく中で、無意識に表してきた「市松模様」に新たな気づきも得ることが出来た。以下は、インタビューを通して応えた自らの市松模様観である。



- ・市松模様は遠目で見ると光が反射しているように見える。そういう効果と模様の魅力を表現に重ねた。
- ・市松模様は本当に完成された美で、その美が時間と共に消えていく・無くなっていく経過を市松模様でも表現したい思いで描いた。また画面に残った市松で日の光をより輝かせたい思いも加えている。
- ・日本人の持つ固有の美意識を歴史的な建物の中で味わってもらいたい。
- ・市松模様は自分の感性の中に響く揺るぎない光と時の流れである。

番組の最後のナレーションでは以下のように語られて番組が締めくくられていた。短い言葉ではあるが、長い歴史を秘めた市松模様を今後の夢を乗せてくれている言葉のように感じた。自分もまたそのような作品を作り続けていきたいという思いもまた新たに感じた。

人の心に宿るそれぞれの市松模様。様々な表現を通して輝きや彩を与えてくれる。

## 【引用文献】

- 1) 鹿野政直「椅子と剣持勇の近代」『ジャパニーズ・モダン』国書刊行会 2005 P.13
- 2) 森仁史「ジャパニーズ・モダン 剣持勇とその世界」国書刊行会 2005 P.121
- 3) 青柳正規「日本美術館」小学館 1997 P.2
- 4) 山下裕二「水墨画発見」平凡社 2003 P.5
- 5) 「大胆不敵な水墨画」NHK プレミアム8 2011.2.22放送
- 6) ジョー・D・プライス「若冲になったアメリカ人」小学館 2007 PP.23-24
- 7) 「江戸あばんぎやんど」NHK 2019放送
- 8) 池田真知子「ジャパニーズ・モダン 江戸から現代へ」パンフレット ギャラリー白川
- 9) 重森三明「シリーズ 京の庭の巨匠たち5 重森三玲Ⅱ 自然の石に永遠の生命と美を贈る」京都通信社 2010 P.5
- 10) 同上書 PP.7-8
- 11) 三榎正典「ジャパニーズ・モダン」レタープレス 2020 PP.1-7